# 血の出るやうな難行苦行記

## 淨瑠璃道修驗者の體驗

時代は進んだ、科學は發達した、機械力が萬能になつた、電氣が物を言つた、人間が恐しく怜悧になつた、一足飛びに成功をした、テンホの時代、天馬空を行くの時代、かうした目まぐるしい狀態である現代から、ふりかへつて淨瑠璃道の修行といふものを觀てみる。むろん、古臭くも見えよう、馬鹿正直でもあらう、ノロマでも致し方が無い。彼れ等は骨を削り肉を殺ぐより外の方法は、修行ではないと思つてゐたのである。難行苦行といふ文字は、あながち修驗道の行者ばかりが經驗した專門語でもない、淨瑠璃修驗者にも當然分け與へて然るべしである。

以下尠しくその實例について云つてみる。

その實例を述べる前にちよつと斷つて置きたいが、これはむろん、現在の淨瑠璃界のことではない、淨瑠璃といふものを自分の命とし、淨瑠璃といふ神樣に身命を捧げてゐた時代、卽ち

明治二三十年頃までの淨瑠璃國の國民の間に行はれたことであつて、現代のやうな所謂文化の發達した時代の淨瑠璃界の人々からは、まるで夢の世界を觀るやうに不思議なことばかりで滿たされてゐる筈である。本題に入る。

その頃淨瑠璃國の法律は、序の切を語れるやうになるまでは、羽織が着られない、冬でも蒲團（樂屋）が敷けない、皮草履が履けない（藁草履）、辨當は握り飯と梅干の外は喰へない、夜明けから詰めて櫓下の太夫が歸るまで外出がならない。まるで無いもの盡しだ。今の文樂では、自分の役場がすむが早いか、サツサツと飛行機でお歸りだ。

勿論誰れもそれを不思議だとも思つてゐない。その上に、師匠の稽古場や家庭に在る間の奉仕、着付けの手傳ひ、風呂の流し、髪結の代理、子達のお守り、來客の取次、入るさ出るさの下駄直し、掃除、洗濯まで、それでも心の配り方が足らぬと云つては拳固。師匠の座蒲團や、見臺、三味線、撥、などを持たして貰へるやうになれば大分鼻が高い。

素湯を汲まして貰ふやうになれば鬼の首、腹卷でも手傳ふやうになれば赤飯でも配つて祝ひをする程である。さうした暇をぬすんでは師匠や先輩の語り口を聞いて、稽古本に朱を入れる、

萬一の場合替り役でも振つてくれないかと思ひながら、一生懸命手すりの蔭や翠簾のうちで獨り心を碎いてゐる。そんな風で大序を五枚ほど三日目ごとに語らして貰つて、芝居から貰ふ給金が十五日間金三十錢。

通稱堀江の大師匠、五代目彌太夫が死んだ時、彼れが所有の革文庫の中から、汚れの爲めにカチカチになつた手拭のやうな古裂が大切に仕舞はれてあるのを發見した。家人は勿論誰れ一人これが何ういふ素性を持つてゐるものか知る筈はなかつた、また調べて見る必要もないほどのきたない古木綿の裂である。ところが後年彼の日記の記事によつて、この古裂の素性が判明した。それはいつたい何の用を爲すものかといふと、彌太夫が師匠と奉じた名人長門太夫の痰拭ひの木綿裂であつたのである。道理で鼻や痰の爲めにカチカチに固まつてゐる。長門が或時語り場で、意氣込みの途端の拍子にこの痰拭きをポンと下へ投げた、下には弟子の彌太夫が湯を汲みながら本へ朱を入れてゐた、彼れはその痰拭きをそつと懷中へ忍ばせて持つて歸つてしまつた。さうして師匠ほどの藝人になれますやうにと毎日その痰拭きに祈つてゐた。

その彌太夫は有名な悪聲小音、それだけ修行に一層困苦を嘗めた、父親は道具屋、髪結、湯屋の株を持つた人だが、浮瑠璃好きで、十歳にも足らぬ彌太夫に藝を仕込まうとした。而かもそれが馬鹿に嚴格で、十一歳の時に長門太夫の門に入れたが、覺えが悪いと云つてはお手のものの風呂へ連れて行つて、彌太夫を逆さに抱いて、湯槽の中へ頭を突き込む。驚くまいことか浴客は見てゐられないので仲裁する。これはいつもの事だつた。彌太夫はこの時の心持を日記に書きつけてゐる、そしてその末尾に、こんな歌のやうなものを書いてゐる。

しんの闇、みえも恥をもいとはずして、けいこば二階にひとり泣くらむ

古靱太夫の親は川崎屋といふ大工の棟梁だつたが、放蕩で家を潰し兩眼まで潰してしまうた。靱の裏長屋で按摩道引と落ちぶれたが、まだ八歳の古靱は盲目親爺の手を引いて稼ぎに附いて行く。初代靱太夫の家に出入りするうち、將來を見込まれて淨瑠璃を習ひ始めた。貧苦の中の口に言はれぬ難行苦行を積んだのが、後の、天下の古靱太夫となつて光り輝いた。師の靱太夫に從うて江戸へ、二十年間、ミッチリと勉強した。明治三年歸ると文樂座へ、すぐ當時の花形越路と揉み合ふほどの腕前を見せた。

古靱には持病の喘息があつた。太夫のやうな喉を命とするものには殆んど致命傷と云つてよい。古靱はこの難症を征服して、却て名曲を語り活かす工夫をした。それはたいへんな苦勞であつた。喘息でシワガレ聲になつたが、その中に何とも云へぬ旨い情味を出すことが出來た。聲を語るに非ず、情を語る太夫として成功した。廿四孝の十種香でも、始めの濡衣の間で見物を泣かしたといふからえらいもの。

五代目豊澤廣助は氣むづかし屋の上に呑み手で、毎晩のやうに夜更けまで、弟子を前に置いて、チビリチビリと遣りながら、罵倒や小言をならべ立てる。廣助にすると、これが何よりの肴で、弟子にすると、まるで石子詰めの刑罰に遭つてゐるやうなものである。たいていの辛抱は出來るが、この修行には誰れもまゐつてしまふ、だからそのまゝ飛び出して逃げてしまひさうなものだが、不思議に誰れ一人師匠の横つ面を擲つて逃げ出したやうな人間の出たことを聞かない。それは何故かといふと酒を呑まない場合の廣助の熱心な稽古ぶりと、酷しい中に溫かい師弟の情味を多量に有つてゐたからである。

攝津大掾の修業時代、中將姫の雪責のところが旨く行かないので、彼れは夜更け人靜まつて後、ひそかに例の責め場の泣き聲をやつてゐたが思ふやうに行かない、いつそ自分を苦しめて見ようと考へて、疊に顏をすりつけて痛さを身にしめて泣いたりなどしてゐた。長屋の人達は、病人でも出來たか、或ひは怖ろしい殺人でも行はれてゐるのではないかと非常に驚いて、より人を集めてゐる容子が、ふと當人の耳へ入つた。そのうち長屋の人達は大掾の家を起しに來た。いまさら自分の稽古だつたと白狀も出來ない始末で、ぬけぬけとした顏をして大掾も長屋の人達と一緒に隣り近所へ、うめき聲の主を尋ねまはつて歩いた。

『のろま』といふのが三代目竹本大隅太夫の幼時の異名であつた。だから修業時代の際でも、無論此のろまは除かれてはゐない。團平について木下蔭狹間合戰の『壬生村』を稽古してゐる或る夏のことだつた、石川五右衞門の妹小冬が——守り袋は遺品ぞと——といふところが、どうしても語れない、文句は語れるが情愛が語れないのだ。團平は何百回といふほど、此處を繰りかへさせた、大隅はもう泣顏をしてゐた。團平は、のろまだなとしみじみ思うたがそれでも、いつまでもいつまでも稽古をつけてやつた。とうどう團平は蚊帳の中へ入つて横に成りながら

大隅の語るところを聞いてゐた。大隅は蚊に喰はれながら相變らず、――守り袋――をやつてゐる。短い夏の夜はもう明け方に近かつた、大隅は相變らずやつてゐる。うとうと眠つてゐたと思はれた團平が、始めて『出來た』と云つた。團平は實は一睡もして居なかつたのだ。その爲めに彼はとうどう半年ばかり醫者通ひをした、目を疾つたのだ。この事を話していつも大隅は泣いた。大隅の執拗な猛練習もえらいが團平の熱情は更にえらい。

かうして壬生村が出世藝になつた大隅には、まだ生命がけの『合邦』がある。春子と名乘つてゐる時代だ、姫路の旅興行の舞臺で、例の合邦の詞の――オイヤイオイヤイ――がどうも情が乘らないので三味線の團平師匠は、いつまで經つても次を彈いてくれない。たゞさへ繰り返しの此くだりに大隅は彈かれるまゝに無我夢中になつて語つてゐた。怒鳴りつゞけた大隅は、いつか頭がボーとなつて、見臺へ顏を伏せて放心狀態になつてしまつた。原因を知つてゐる團平は騷がずに大隅の狀態に注意をしてゐた。見物や樂屋の人達がハツと氣附いて立ち騷ぐ物音に、ふと我に還つた大隅はどうやらあとをつゞけることが出來た。おそろしい修行もあつたものだ。ほんに生命がけだ。

三代目越路太夫が稽古をつけて貰つた豊澤團七は評判のむづかし屋である。越路がまだ子供の時代だが、覺えが悪い、といふので、團七は細帶で越路を縛つて、雪の降る庭へ突き出して立樹に縛りつけて置いた。雪はドンドン降りしきる、日は暮れて夜は更ける、それでも、しくしく泣いてゐる越路に向つて、師匠は『よく考へて見よ』と云つて許さうとはしなかつた。あまりに歸宅の遲い我子を案じて越路の父は師匠の許へ尋ねよつた。來て見れば此始末だ。――なんぼなんでも、あんまりだ――と父は師匠に喰つてかゝつた。師匠はかう云つた――一人前の藝人にしようといふのなら、これくらゐの折檻は我慢をしなさい――と。

この師匠の三味線で、泉州佐野の旅興行に出掛けて忠臣藏の九段目を語つた時、越路はもうもうしみじみ師匠の嚴格さを知つてゐるので、なんとしても師匠の滿足を買はねばならないと、思ひあまつて、三里ほども道程のある犬鳴山の不動山へ深夜の跣足まゐりをやつた。さうして――どうぞ此大役を果し得まするよう――と水垢離をとつて唯一心に祈りに祈つた。

越路は生涯、この團七師匠を藝の親として感謝してゐたが、その團七師匠に貰つた記念の傷痕が、前頭部に撥で擲られた處一箇所、後頭部に銅の十能で打たれて禿になつた處一箇所、二

階から蹴落されたぐらゐは毎度のこと、皆猛練習の記念碑だといふ。

難聲の五代目彌太夫は、泣きと、笑ひの、稽古にどれほど苦勞をしたか知れない。毎朝未明に天王寺河堀口の長門師匠の許へ通ふ時、第一にそれが氣にかゝつた。難聲の者は一度泣くところを二度も三度も泣かねばいけないと教へられてから、いつも道々泣きの稽古をしながら我を忘れて歩いて行く。高津邊の或る大工の家では、――それ泣き男が通つた、かゝよ朝飯にしよう――と時太鼓の代りに使はれてゐた。

昔は太夫や三味線彈きの修行の中に、酷寒の寒稽古といふのがある。寒風の吹きすさぶ冬の野ッ原などへ出て、夜明け前とか、深夜を撰つて、そこで笑ひの稽古、大泣きの稽古などから、あらゆる發聲の練習をやる。三味線彈きは寒中の舞臺で、太夫の詞の間など、ヂッと待つてゐる間に手の凍ることがある、それで寒稽古の訓練が大切となる。名人廣助の話に、寒中に二階の椽端に座り、小桶に水を入れて傍に置き、三味線を彈く兩手の先を幾度となく、その冷水の中へ突つ込む、殆ど無感覺になつた手を手拭でよく拭いて、それで三味線を彈く、これを幾回

となくやる。手の耐寒法。

稽古中の人形遣ひは、人形を天井からぶら下げて、胴と足を遣ふ稽古をする。故人多爲藏が師匠の吉田金四の許で、これを遣つてゐると、師匠の友達の二代目吉田辰造がよくやつて來て、師匠と一緒になつて、さんざんに拙い多爲藏を罵倒する。多爲藏にはつくづくそれが情けなかつた、然かし倦まず撓まずそんなことを三年ばかり遣つてゐるうちに、とうとう芝居から金一朱の給料が貰へるようになつた。彼は無上によろこんだ、一朱は六錢あまりの金である。人形の片足を一人前に遣ふには十年かゝると云つてゐる。半分に聞いても大變な話。

紋十郎は幼い時に、切り紙で人形を作り、障子へ影人形を映し出して勉强したものだ、十三歳の時、吉田辰造の弟子になつて修行した。先代萩の御殿で春太夫が語り、師匠の辰造が政岡を遣ふので、紋十郎はその足を遣うてゐた、クドキの絶頂になり『武士の種に生れたが、果報か因果か、いぢらしや』のくだりになつて、『いぢらしや』の間がどうしても踏めない、叱られて固くなるほど尙ほ踏めない。一日二日三日と日は重さなるが、どうもうまく踏めない、そ

のたび師匠に例の高下駄で散々に蹴りつけられる。他に床下の鉄之助を遣うてゐたが、政岡の足でフラフラになつて呆けてしまうた紋十郎は、これも思ふやうに遣へないので、鉄之助の役を取り上げられ、天保錢だいまい二枚の給金が一枚となつたので、仲間には嗤はれる、輕蔑される。遂に居たゝまらず、恥辱に泣きながら大阪を逐電、信州飯田の吉田才二の懐へ飛んで行つた。しかしこれが名人となる動機となつたから、逸話となつて殘つた。

團平が東京興行中、宿から芝居への途すがら、ある長屋のかゝりにある女義太夫の師匠の門口に立つて、ヂッと稽古を聞いてゐる。弟子が不審に思うて、あんな怪しげなベコベコ三味線を聞いて、どうなさるのですかと問ふと、『あの三味線をよく聞け、あれでも素人の語られる絃だ、お前たちは時に玄人でさへ語れぬ三味線を彈くぢやないか』團平は場末の怪しいボロ三味線をも、よう味うて修行のたしにした。長門太夫は頭巾で顏を隱して芝居果の群集にまざつて批評を聞いた。元祖の義太夫は不入の興行にも屈せず十九年間の隱忍苦戰を續けた。二代義太夫の政太夫は一座の輕蔑と世間の冷笑の中に難行苦行して、とうどう國性爺を十七ケ月語り續けて認められた。名人は名人だけにまた凡人以上の苦心もあり厄難も大きかつた。

長門太夫が『吃の又平』の吃の音便についての惨澹たる研究記録が殘つてゐる。例へば、アイウエオは口を明き出る息とか、タチツテトは上腮へ付けて舌を離すとか、サシスセソは口を明き齒を嚙み合はすとか、笑ひは上へ少しはづれる、泣きは上へ大きにはづれるなど細密に敎へてゐる。初代染太夫も『吃詞の傳』を書いてゐるが非常に參考になる。本來口舌を生命の藝術に、吃りを語るは大難事ではあるが、如上の音便法によつて語ると、文辭は能く判つて而かも吃の言葉らしく聞こえるのは奇妙である、名人の頭はやはり優れてゐるが、こんなにまで日常絕間のない工夫が積まれてゐた。『忠臣藏判官切腹』の判官臨終の詞『由良之助、この九寸五分は汝へかたみ』を、長門太夫は『コヲ、フスン、ゴバ、ランリ、ヘ、カサミ』と、ゴバを早めに輕う息を吐くやうに發音し、カサミを、カ、サ、ミ、と押し氣味に斷續して語つたが、判官の舌、唇が硬直し、いかにも臨終の人らしく悲痛な感じに聞こえたといふ。切腹とか手負ひとかの役の言葉の使ひ方、音便は、なかなか六づかしい、それが淨瑠璃には又甚だ多く現れてくる。『新薄雪』の、俗に『薄腹』は皮肉物で、二人の武士が祕密に切腹しそれを匿して、互に眞意を探り合ふうち、それと判つて思はず哄笑するが、長門はこの言葉の練習法として、赤貝を臍の邊に當てゝ語つた、言葉するたびに赤貝が臍に觸り、自然と手負ひらしい音聲が出

るからである。この長門の弟子堀江の彌太夫は丼鉢を二つに割つて腹へ當て、上を薄い布で卷いて笑ひの練習した。若し布が裂けるやうでは五臓六腑がはみ出すのと同前だから、この布の裂けぬやうに笑ふ稽古をしたものである。この傳授を受けた九代染太夫が猛烈な練習の結果、文樂で好評を博したが、その爲め腹の疵で二三ケ月病氣缺勤したことがある。

今云うた五代彌太夫はこの赤貝訓練丼鉢組の一人だが、得意の『沼津』の切腹後の平作の言葉のイキは、侍でなく卑しい駕籠かきの老爺が腹を切つての死物狂ひと云ふのに重點を置き、これを猫喉の音便で語つたから、何人も驚いて感に入つた。この猫喉といふのは、猫が喉をゴロゴロと鳴らす、あの音遣ひから工夫したもので、喉の中でゴロゴロと痰を轉ばすやうな音色を出すのである。彌太夫は猫喉の名人で、これは他に眞似手がない、妙な祕藝もあつたものである。

その沼津の前段、荷持の老爺平作が重兵衛の行くのを見かけて『旦那、申し、お泊りまで參りませうかい、申し旦那様どうぞ持たして下さりませ、今朝から一文も錢の顏を見ませぬ、ど

うぞお慈悲』とあるくだりの、平作の心構へを彌太夫はこんな風に說明してゐる。稻叢の蔭にしやがんで、煙草一服休んでゐる前を、重兵衞が行き過ぎる、それに話しかけながら平作は、煙管をはたいて、ドツコイショと老の腰を伸ばし、ボソボソ立つて重兵衞の傍に來て懇願する。かうした動作や情景が此の言葉の中に現はれて來ねばならぬ、それでこそ淨瑠璃が面白く聞かれるので、棒讀みしては味もそつけもないと云つた。沼津の役を勤める五代住太夫が、稽古をつけて貰うたが、どうしても氣分が出て來ない、この一とくさりを幾十回と練習したが、芝居の千秋樂の日になつて、ヤツと出來たと思うたら、翌日はモウ誰れも聞いてくれる人が居なかつたと、これは住太夫が頭かきながらの一つ話。彌太夫がこゝを語り活かした時、重兵衞を遣うてゐた今の吉田榮三が、人形を遣ひながら平作の言葉を聞いて、心のそこから氣の毒になり、思はず傭うてやれ、といふ氣持になつたのは奇妙でした、と話してゐた。

彌太夫の寫實味は、いつも必ず情愛の上に築かれてゐた。情の表現には骨身を削つて苦心工夫を凝らした。稽古人が稽古を受ける間に、思はず泣き出したといふ例は澤山ある。『佐倉曙』の宗五郎牢屋の稽古中、住太夫小團二の稽古人始め、そこに居合せた人たちが總泣きに泣いた

のは有名な話である。某太夫が宗五郎子別れを稽古して貰うたが、宗五郎が忍んで歸つて來て、おさんおさんと戸外からソッと呼ぶ、子供に添乳しながらウトウトと眠つてゐた女房は『今のはたしかに夫の聲』と、夢うつゝに思うたが『アゝ思ふまい思ふまい』と氣を持ち直すのであるが、それが初めからハツキリ目を明いてゐる聲に聞こえる。そこで師匠は傍にある座蒲團をクルクルと丸う卷き、子供に見立てゝ某太夫に抱かせ、寢てゐて『今のはたしかに夫の聲』をうつゝのやうに云はせ、今度はチヤンと座り直して『アゝ思ふまい思ふまい』とスツカリ氣を換へて云はせた。某太夫は一生懸命、內へ歸つても又しても蒲團を抱いて寢たり起きたり、妻や娘に笑はれたが、やがて情味が浮かんで出て成功したといふ。

『菅原の道明寺』の菅公は、神格を表はさねばならぬ難役だが、六代染太夫はこの言葉遣ひに精魂を傾注して研究した。菅丞相が木像身代りの靈驗を語る條に『……巨勢の金岡が書いたる馬は夜な夜な出でて萩の戸の萩を喰ひ』とあるを、『出でて』を『んでて』と音で語り、『萩を喰ひ』を『くう―ひ』と引いて語つたので、菅公の品格が一段高く聞かれたといふこと――こんな話を書き出しては殆ど際限がないが、どれもこれも粒々辛苦の種でないものはない。

吉田多爲藏は玉造紋十郎に匹敵する手すりの名手である。硬骨で直言家でまた皮肉屋でもあるが、明治初期の修行苦勞談が率直に某雜誌に紹介されてゐるので、その一節を左に轉載する。

『私が人形つかひになるやうになつたのは、九歳の時に人に勸められて堀江市の側の堀江座に出て居た吉田金四といふ人に弟子入りしたのが始です。其時分の修業は中々嚴しかつたもので、殊に私の師匠と來たら其上にも嚴しく、入門の最初は、先づ師匠の履物を揃へるとか、外出の供をするとか、歸れば家の內外の掃除から臺所の用まで足し、それが濟めば雜巾をさす、指固めだといつて師匠は元より妻女や娘達の肩を揉ませられる、それも揉んで呉れといふのでなく、揉まして貰へといつたやうな調子です、そしてやれ供をするに餘り間が近過るの遠過るの、やれ提灯の持樣が惡いのと、叱られ通しです。芝居では人形の屍骸とか煙草盆とかを手摺の蔭に兩手を伸して支へて居るのが役で（その頃は今の樣に臺を使はなかつたのです）それが少しでも動いたりすると直ぐ叱られます。それから少し經つと今度は木偶の足を天井に吊して、體の使方を稽古するので、師匠の家は新町の越後町に在りまして、その格子內で一生懸命に習ふのですが、足の使方が惡いとか、體が据らないとかいつては、煙管で打叩かれる。そこへ之も名人でしたが二代目辰造といふ人がよく遊びに來て、師匠と一緒に

なつて、矢張り煙管を斜に構へて、叱つたり叩いたりします。外には近所の藝妓や娘達が寄つてたかつて覗いて居るので、隨分格好の悪い思をしたものです。時には餘り折檻が烈しいので、藝妓が見兼て、中へ這入つて謝つてくれたこともありました。漸く足も動くやうになると、芝居へ出て一人使の人形を持たせられます。こんなことで滿三ケ年稽古を積みましたが、其間一錢の給金とてはありません。三年目に始めて一朱貰ひました。今の六錢二厘です。

（中略）

前申上げます通り、私等の修行時代は隨分辛かつたもので、夜家へ歸つて寢る間といつたらホンの三時間位しかありません。ですから外を歩いても眠いので、電信柱にぶつかつたり、郵便箱に凭れて眠つたり、芝居へ往つても奈落へ落ちたりすることは始終です。そんな修行をして來ても、今日私のやうな棒鱈です。今の人は藝に苦まなくても、少し交際さへ上手にやれば、忽ち立物になれるのですから、苦しんで修行した私達はつまり馬鹿ものです。最後に私の希望としては、只長命したいと、これだけです。氣樂に長命して居たら、現在の名人方が皆死んでしまつて、仕方がないから私のやうな者でも、ちつとは何とか言つてくれる時代が來るだらうと思つてます』

長門太夫が二代廣助と伊勢の三井邸へ招かれた時の話が『義太夫新論』に載つてゐるから借用する。その時廣助が某素人の先代萩御殿を彈いた、中途で某氏の語りが三味線と外れて來てそれからは調子が狂ひめちやめちやになつた。これを聞いてゐた長門は、廣助が樂屋へ入るや否や猛烈な血相でいきなり廣助の横づらを擲りつけた、そして三味線彈きを廢業して大阪へ歸れと宣告を下した。一座は愕然色を失うて呆然、廣助はと見ると、ションボリと兩手を前について平伏してゐるといふ有樣。これは、玄人の三味線彈きが、慰み半分に語る素人に對して玄人と同樣の手を出すとは何事か、それだから語り手を散々に弱らせたのだ、玄人と素人との見解のつかぬ者は一人前の三味線彈きたる資格はないと云ふ長門の見識である。當時三味線の名手として鳴らしてゐる廣助を、たゞ本業人たる本領を誤つたと云ふ一小事ながらも、斯道の權威を尊重して擲りつけた長門も長門だが、擲られて反抗もせず制裁に服從しようとする廣助もさすがである。藝道に眞劍な武士道精神がこの二人の行動に輝かしく光つてゐる。義太夫魂の逞しさ。この美しい烈しい氣魄が、今の文樂にも欲しいものゝ一つである。藝道上違疑ひなしの妙藥であると思ふ。

誠意で熱心で眞劍で、魂をたゝき込んでの、唯々一心不亂の難行苦行、彼等は已の藝道目が

けて必死の體當りを食はせたものである。そこから自然と頭の下がる尊い藝術が生れてくるになんの不思議もないのである。生きた證據は、東亞大戰爭に實現された我が將兵の赫々たる奇蹟的大捷の戰果に見れば、立ちどころに合點されるだらう。著者は、最も親しみ深い今の文樂人諸子の自省發奮、猛々訓練、烈々研究を心から祈願するものである。

## 三味線彈きの名手

團平、廣助、その他かずかず

巨匠三世長門太夫の三味線を二十六年間彈いたのが名手三代目鶴澤清七、但馬國の山奥から出た、その勝右衞門時代には但馬の鬼勝と呼ばれたほど、頗る劇しい藝の荒神、亭主も亭主、女房も女房。

氏太夫を彈いた初代鶴澤勝七は、節附の名人、攝津西宮で勝鹿齋といふ名で納まつてゐたが、